



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	【コラム】「記録をとると、明日がもっと楽しみになる!？」(III 保育記録を活用する)(fulltext)
Author(s)	赤石,元子
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学附属幼稚園, 24/25: 43-43
Issue Date	2013-12-07
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2309/148356">http://hdl.handle.net/2309/148356</a>
Publisher	東京学芸大学附属幼稚園
Rights	

保育記録を書くという行為は、幼児理解、遊び理解を深め、指導を改善していく上で欠かせない。しかし、現実には忙しさに追われて書けなかったり、何をどう書くか迷ったり、読み解けないままに明日を迎え書きっぱなしになっていたりする。保育という複雑な状況を記録にとどめることは難しく、努力を要することである。子どもも遊びも一時も留まっていることはなく、状況は絶えず変化しているからだ。

本研究の動機には「記録がさらに次の日の遊びの充実や、幼児の育ちにつながったり、幼児の抱えている課題をとらえられるようになっていたりすれば、記録を書くという行為がより意味をもつものになるだろう。」とある。幼児理解、遊び理解を深め、指導の改善を図るための記録とはどのようなものか。事実を羅列するだけの記録では、幼児理解も深まらないし、明日の援助につながっていかない。記録には、子どもの行動から育ちや課題を読み取り援助につなぐ思考のプロセスが書かれていることが重要である。子どもの行動をどう読み取ったかによって援助は変わってくるからだ。また、記録を継続しつないで見ることによって、子どもの育ちと援助の妥当性を振り返ることができる。

3歳児学年の事例(p.28~p.31)を見てみよう。一学期、教師はD児を「落ち着いて遊んでいた」と読み取っている。9月に入って降園時に泣き出すD児の個人記録をとるようになるが、「すぐに安定するのでは」と述べ、援助は明確ではない。続く20日の記録には「今日は母親と分離すると泣き出し吐く」とあり、「しばらく泣くことが続くと判断して」「かわる時間を多くとりたい」と具体的な援助を見いだしている。10月には「ドングリを教師に何度も見せに来て、自分の気持ちを受け止めてもらえたことが、気持ちの変化につながった」と振り返っている。継続して記録をとることによって、D児の行動の背景にあるドングリへの興味や教師に認めてもらいたい気持ちに気付くようになっている。そしてD児の思いを受け止め、みんなでドングリを拾いに行くという活動を取り入れている。これらの記録をつないで振り返ってみると、一学期は「落ちついて遊んでいる」と見えたD児は、実は「期待に恋えているようにも思える」「教師とかかわりを十分にもちたかったのだろう」と気づき、かかわり方を反省している。また「その時にはすぐに援助がみえない」が、記録を継続して振り返ることで、「その後の一人一人の成長を読み取るための手がかりになっている」と述べ、翌年も「自分を出せずに我慢している姿はないか」と考えるようになったという。

継続して記録をとり振り返ることによって、教師が変わり、子どもが変わる。教師が何の疑問ももたずに直感的・経験的な判断にまかせて保育をしている時には、記録を書くこともしないだろう。教師に問いが生まれると、幼児をよく見ようとするようになる。よく見ることは、書くことにつながる。書くことは考えることである。教師の中に『問う→よく見る→記録して考える→援助する→記録を重ねる→よく見る→』という循環と継続が生まれると、記録の難しさは面白さに変わっていく。記録をとると、明日がもっと楽しみになる!？ そんなふうになりたいと思いつつ、今もしみながら書いている私です。